

維新遅い対応 モラルは

大阪に転居してから「維新政治」に振り回されてきた。最近の選挙で日本維新の会が議席を大幅に増やし、国政でも存在感を高めている。大軍拡や改憲などでは、自民党を煽動する役割を果たしている。その一方で、国会議員や地方議員の不祥事や暴言が続き、批判の声も高まる。

東京新聞 5 月 19 日「こちら特報部」は、在阪メディアと違って表題についても鋭く迫っているので、抜粋して紹介する。

筋道立たない強弁をかばいきれなくなったか。名古屋出入国在留管理局で死亡したスリランカ人女性ウィシュマ・サンダマリさんを巡る発言で、日本維新の会が梅村みずほ参院議員を処分した。対応が遅れ、批判に耐えられなくなった格好だ。そもそも維新議員の問題発言は後を絶たない。統一地方選で躍進し、国会で野党第一党を狙うというが、モラルと責任感はあるのか。

問題の発端は、入管難民法改正案を審議する 12 日の参院本会議だった。「支援者の一言が、ウィシュマさんに『病気になれば仮釈放してもらえる』という淡い期待を抱かせ、医師から詐病の可能性を指摘される状況へつながった恐れも否定できない」。梅村氏は自説を展開し、物議を醸した。

根拠をただす遺族代理人弁護士の質問状に、梅村氏は 16 日の参院法務委員会の場で回答。「事実はない。しかし可能性は否定できない」と開き直ったような強弁をした。さらに「ハンガーストライキによる体調不良で亡くなったかもしれない」とも発言した。遺族らは「事実無根で死者を冒瀆している」と猛抗議。

昨年の参院選、先月の統一選で議席を増やした維新だが、不祥事は止まらない。暴言を振り返ると、従軍慰安婦問題に絡め「日本には韓国人の売春婦がうようよいる」と発言した議員や、北方領土を巡り「戦争で取り返すしかない」と言いのけた議員がいた。一方で他党の失態には厳しく、立憲民主党の小西洋行参院議員が 3 月、衆院憲法審査会をサルに例えた際には糾弾。

「維新は党勢拡大のために議員を増やすことを重視し、質をおろそかにした。個々の人間性やモラルは問われないうままに、党の指導も行き届かない状態だ」と、維新や大阪の政治事情に詳しい吉富有治氏はみる。政治ジャーナリストの泉宏氏も「『事実でないが、可能性は否定できない』なんて国会議員の言葉じゃない」と切り捨て、維新の対応の鈍さに厳しい目を向ける。「地域政党から脱却できず、全国政党として成長していないことを露呈した。いまだまとまりきらない党の統治を進めるべきだ」

地域政党・大阪維新の会の笹川理府議が 22 日付で府議団代表を辞任した。維新所属の女性市議へのパワハラ・セクハラが理由だが、これも対応が遅いと批判されている。

(2023 年 5 月 26 日)